

蔡元培と中国民権保障同盟

—中国民権保障同盟をめぐる人々 その2—

吉 川 榮 一

はじめに

西洋近代社会の「人権」観が近代中国に紹介されたのは、そう古いことではない。本稿で取り扱う蔡元培は、最も早くから人権の尊重を説いた一人である。彼がドイツ留学中に執筆し1910年に出版した『中国倫理学史』において、「君権」と対置するものとして「民権」という語を諸処に使用しているのがその一例である。このことから窺えるように、蔡が「民権」、今日的に言えば「人権」に早い時期から関心を抱き、人権尊重の思想をきわめて重要視していたことは疑いを容れない。『中国倫理学史』中の次のような記述が人権尊重に対する蔡の姿勢を端的に物語っている。彼は孟子の政治論に論及する中で、「〔孟子が〕民権を提唱した点は、孔子にまさっている⁽¹⁾」と書いているのである。すなわち、彼は孟子の先見性を示すものとして、「民権」というキーワードを使っている訳である。

蔡元培がこうした「民権」尊重の思想を抱くにいたる過程で、彼の留学経験が大きく作用したであろうことは想像に難くない。西洋における思想の自由・学術の自由・人権尊重などといった近代的概念それ自体には留学以前から触れていたであろうが、実際にライプチヒ大学などに在籍する中で、思想学術の自由とはいかなるものか、人権を尊重するとはどういうことなのかを感じ取ったことの意味は小さくないはずである。とりわけ、西洋社会の人権尊重思想については、清朝を打倒し共和制を樹立せんとして革命運動に身を投じていた彼にとって無視し得ないものであったであろう。

しかし、だからといって、蔡元培が、西洋近代思想に影響され、「君権」の上位に「民権」を位置づけたのだと結論づけるのはやや早計である。蔡が人権尊重を唱えたのは、単に革命闘争の必要上からでもなければ、西洋思想からの翻訳的紹介のためでもなかったからである。むしろ、彼自身がそれまでに眼にしてきた中国の古典的教養の延長線上に、「民権」というものを見出したと見るべきであろう。つまり、蔡元培の思想形成の過程で、弱者への視点というのが形づくられてきたということである。上述の孟子の例もその一つであるが、蔡が俞正燮を彼なりの視点で「発見」し、高く評価していた事実を見落としてはなるまい。蔡はそれまであまり知られていたとは言えない俞正燮を、民権・女権を唱えた学者として彼の『中国倫理学史』に取り上げた。蔡は俞正燮の思想を紹介するにあたって、こう書き出している。

野蛮人と文明人の違いはどこにあるのか？ それは、人格の観念の軽重にはかならぬ。野蛮人は人格の観念に乏しく、それゆえ他人に対しては強きを畏れ弱きを虐げることが習いとなっている。一方、文明人は人格の観念に篤く、ゆえに他人に対しては、強きに抗い弱きを扶けることが習いとなっている。強きに抗うのは己の人格を保たんがためであり、弱きを扶けるのは他人の人格を保たんがためである。⁽²⁾

蔡元培は以上のような人間尊重の立場に立って、君権ではなく民権を重んじ、男尊女卑の思想を批判した学者として、俞正燮を次のように高く評価する。

およそこうした問題（人権尊重論、女性蔑視思想批判など……筆者注）については、すべて先人の意に留めざるものであった。理初（＝俞正燮……筆者注）に至って初めて、その公平無私の見地から幅広い考証・慎重な判断を行ったのである。彼の論ずるところには、いまだ根本の解決に達するあたわざるもの、また系統だった学理の形成にいまだ到達せざるものがあるとはいえ、その見解を採り上げぬわけにはいかぬ、きわめて価値の高い学説だと考えるものである。⁽³⁾

この、俞正燮に対する高い評価が、とりまなおさず蔡元培自身の人権尊重の思想を雄弁に物語っている。彼自身のちに自らの俞正燮評価の先見性を、「清儒の中で、黄宗羲、戴震、俞正燮三氏の学説が民権、女権に合致するという新説を特に提示した。黄、戴二氏についてはすでに注目している先人がいるが、俞氏の学説については私が初めて取り上げたものである。」と誇っている。⁽⁴⁾ 蔡元培の思想の根幹にあったこの人権尊重の思想こそが、のちの「中国民権保障同盟」結成に結びついていくのである。⁽⁵⁾ 本稿では、蔡元培の人権尊重の思想がその教育理念にどう反映し、それがどのようにこの中国民権保障同盟での活動に結実していったのかに重点を置き、論を進めていきたい。

1

蔡元培は清朝末期にあつて優秀な成績で科擧に合格し、翰林院編修というエリートコースに一時は身を置いた人物である。しかし彼は、辛亥革命の起こる遙か以前にその地位を擲って野に下り、清朝打倒のための革命運動に参加した。もっとも、彼は革命運動家というより教育者であり、辛亥革命以前も愛国学社、愛国女学などで革命運動に貢献できる人材の育成に尽力している。そんな彼が中華民国初代の教育総長（文部大臣に相当……筆者注）に就任したのは、まさに天職を得たというべきであろう。とは言え、草創期の教育部（文部省に相当……筆者注）は、総長・蔡元培、次長・景耀月、に会計員一名のわずか三人の人員がただけであり、スタッフ探しから始めなければならない有様であった。⁽⁶⁾ 中華民国という生まれたばかりの共和国の教育行政、教育制度、教育理念など、およそ教育に関わる全ての事柄を一から作り上げていくことが蔡の任務だったのである。そんな多忙な日々の中、彼は中華民国の教育理念はどうあるべきかを論じた「對於新教育之意見」という一文を発表する。その中で彼はこう説いた。

教育は二つに大別される。政治に従属するものと、政治を超越したものである。専制時代（立憲制でありながら専制的な性格のものを含む……原注）においては、教育者は政府の方針に従って教育の規準を定め、常に純

粹に政治に隷属していた。しかし、共和制の時代においては、教育者は人民の立場に立って規準を定めなければならない。すなわち、政治を超越した教育でなければならない。⁽⁷⁾

教育の政治からの独立という理念を高く掲げ、単なる実利主義的な教育に終わることなく、人間が人間らしく生きていく力をつけていく手助けをするものが教育であるというのが彼の主張である。このとき彼は、軍国民教育、実利主義教育、公民道德教育という現実の社会生活に有益な三つの柱を統括するものとして、世界観教育、美感教育の二つの柱を立て、単に物質的利益・現世的幸福だけのための教育ではなく、精神的な豊かさをも保障するものとしての教育を提唱したのである。⁽⁸⁾

政治及び宗教から独立した教育というのは蔡元培の決して譲ることのできぬ大原則であり、教育者としての蔡元培は終生これを自ら実践し、中国社会に根付かせるべく努力したと言っても過言ではない。彼のこうした姿勢は、1919年の五四運動の際にも明確に示されている。五四運動当時、蔡元培はこの反帝国主義運動の中心たる北京大学の学長であった。学生たちの政治運動参加の動きを前にして、蔡元培は「思想の自由」の原則を堅持し、「二十歳以上の学生は自由に政治活動に参加することを許可する」という立場から、学生たちの自由な活動を容認した。当時の北京大学には二十歳以下の学生などほとんどいなかったから、これは実質的には全ての学生の政治参加を保障したに等しいものであった。当時の北京大学学生の一人は、蔡元培逝去直後に書いた追悼文の中で次のように回想している。

蔡先生は亡くなられたが、蔡先生のあの精神——あの人道、正義、科学、真理のために奮闘する精神と、堅実に社会の気風を改めようとする精神は、永遠に人々の胸中に留まり、消え去ることはないであろう。

（中略）

「五四運動」は当時の社会運動であり、全国の青年がこぞって参加した社会運動であって、北京大学だけのものではない。しかし、「五四運動」

を発動した主力は北京大学であり、その精神上の指導者は蔡子民先生である。いや、蔡先生は単なる精神上的の指導者であったのみならず、全くのところ実際上の実行者であった。なぜなら（五四運動前夜の……筆者注）五月三日夜の学生大会は蔡先生が開催を許可されたものであったし、デモ隊の出発も先生はご存知であった。我々三十二人の学生が護送車で監獄に送られてからは、先生は当時の暗黒勢力の圧力や威嚇、一般の浅はかな連中の非難をこれまで以上に蒙りながらも、常にあの何物をも畏れぬ態度で身を挺して責任を果たされた。彼は断乎として三十二人の学生を一人一人監獄から無事に救出されたのだった。⁽⁹⁾

蔡元培の自らの教育理念に忠実な行動が、その人格に触れた青年たちに大きな影響を与えていたことが上記の回想から窺える。教育者としての彼は、人間を政府や特定の集団の有効な道具にしようとするかのごとき教育にあくまで反対し、青少年を人道や正義の実践者に育てていくことが教育だと考えていたのである。1922年に発表した「教育独立議」の中でも、蔡元培は次のように述べている。

教育とは、教育を受ける者に自己の能力を発展させ、その人格を完成し、人類の文化において一構成分子としての責任が果たせるよう手助けすることである。教育を受ける者を一種の特殊な道具に仕立て上げ、別の目的を抱く人物に利用させるためのものではないのである。それゆえ、教育事業は完全に教育者に委ね、独立した資格を保持させ、各派の政党や各派の教会の影響をいささかも受けないものでなければならない。⁽¹⁰⁾

では、蔡元培のこうした理想は実現されたのだろうか？ 残念ながら、答えは否である。初代教育総長時代、北京大学学長時代、そして北伐後の国民党統治下の「中華民国大学院」院長時代を通じて、彼の理想はついに実現されることはなかった。

北伐が勝利のうちに終わり、国民党の下で新たに政権が樹立したとき、蔡は

再び教育行政の最高責任者として迎えられた。中華民国成立以来15年、北伐の成功により国内から軍閥の勢力がほぼ一掃され、南京を首都とする新政権が誕生したこのときこそ、蔡の理想を実現する好機の再来と言ってよかった。彼はこの所謂南京政府において、教育行政委員会の中心メンバーであったばかりか、国民党中央監察委員、政治委員会委員などといった要職を兼任し、政権の中樞を担う立場にあったからである。彼の当時の意気込みは、従来からの教育部を廃止し、「中華民国大学院」という名の新しい教育行政の最高機関を創設した事実にもよく示されている。⁽¹¹⁾ 中華民国大学院院長就任にあたって、彼はこう語っている。

顧みてみれば、この十数年というもの、教育部は北京の腐敗した空気の下で、ほかの官署の悪習に染まり、長たる者さえ時として学術教育の何たるかを知らず、私利を求め徒党を殖やすことのみに専心する輩であることすらあった。類は友を呼び次第に墮落し、ついには「教育部」という名が腐敗官僚と密に結びついて連想されるまでになった。国民政府が教育部という名を捨て、学術教育の管理機関を「大学院」と名付けるにいたった所以である。⁽¹²⁾

しかし、教育の政治からの独立という彼の理想は、時の政権にとってあまりにも危険なものであった。「国民政府大学院」ではなく「中華民国大学院」と敢えて彼が命名したその組織は、「以党治国」を党是とする国民党政権の容れるものではありえなかった。かくして、国民党内部から沸き起こった「大学院」廃止の大合唱の前に、蔡が精魂を傾けて取り組んだ新制度はもろくも潰え去ったのである。1928年8月、蔡は大学院院長辞任を申し出ると同時に、国民政府委員、司法部長代理、国民党中央監察委員、中央政治会議委員など国民党及び国民政府の全ての役職を返上して、政権の中樞南京を後にしたのである。彼は、上海の租界内にあった中央研究院内に居を移し、これ以後二度と国民党政権とは行動を共にしようとはしなかった。後年彼は、「私は大学院を離れてからは、中央研究院院長職に専念した。教育界と間接的な関係がなくなっ

たが、教育行政には二度と関与しなかった。」⁽¹³⁾と語っているが、「教育行政には二度と関与しなかった」という言葉に、彼の深い失望と無念さが滲み出ている。政治から独立した教育によって、自立した人間の育成を目指した彼の理想は、現実の政治権力の前についに屈さざるを得なかったのである。清末に革命運動に身を投じて以来、常に祖国の将来を憂い、共和国にふさわしい新しい中国の「公民」を育てることを自らの使命としてきた蔡元培の目には、国民党は党への権力集中を最優先し、中華民国建国の理念を忘れ去った存在として映っていたに相違ない。これ以後彼は名誉職的な地位に就くことはあっても、国民政府及び国民党とは常に距離を置き、一知識人として自己の良心に従ってのみ行動する道を選んだ。

2

いったんは政治の世界から身を引こうとした蔡元培であったが、政治状況の方がそれを許さなかった。日本軍の侵略行為がエスカレートしていくにつれ、それに抵抗する青年たちの活動も勢いを増していったが、国民政府はそんな青年たちの多くを共産黨員もしくはそのシンパとして厳しく取り締まろうとしたからである。満洲事変、上海事変と打ち続く日本による侵略行為を目の当たりにして、亡国の危機感に駆られた多くの青年たちは「抗日」を唱えて街頭へ戦場へと身を投じていった。けれども、日本に対して妥協的な態度を取り続ける国民政府は、そんな抗日学生たちの活動を共産党による煽動と見なし、厳しい弾圧を加えた。国民党当局者にとっては、「抗日」よりも「掃共」こそが先決問題だったからである。しかし、蔡元培にはこうした国民党の態度が許せなかった。すでに引用したごとく、「教育とは、教育を受ける者に自己の能力を発展させ、その人格を完成し、人類の文化において一構成分子としての責任が果たせるよう手助けすることである」と考えていた蔡にとって、個々の青年が国民党支持者であろうと共産党支持者であろうと、そんな政治傾向の問題は副次的なことではない。人類の文化の継承発展に貢献しうるか否かが何より重要な問題なのである。日本軍による中国侵略は、人類の文化の一翼を担ってきた中国文明の存立を危うくするものであると認識していた蔡にしてみれば、抗日運

動に参加した青年たちこそ、まさしく「人類の文化において一構成分子としての責任を果た」しているのであって、咎められるべきものでは断じてないのである。

蔡元培は、1932年1月28日の上海事変（一・二八事変）勃発直後、中山大学、北京大学など当時の中国を代表する五大学の学長と連名で、次のような書簡を国際連盟に書き送った。

日本の陸戦隊及び二十数機の航空機は、上海の閘北、江湾などの地域で暴虐な行為をほしひまに繰り返し、且つ文化機関を故意に破壊している。中国最大の出版社である商務印書館や東方図書館、暨南大学などはほぼ灰燼に帰した。我々は、中央研究院、中央大学、中山大学、北京大学、武漢大学、清華大学を代表して、速やかに有効な手段を講じ、文化事業及び人類の進歩を破壊する日本軍の暴虐行為を制止されんことを切に要請するものである。⁽¹⁴⁾

つまり蔡元培には、日本軍の侵略が中国文化そのものの破壊として映っていたのである。彼がいかに焦燥感に駆られていたかは、上記の公電を打電した直後、個人としても国際世論への働きかけを行った事実がよく物語っている。彼はアメリカの複数の知識人に宛てて次のように打電した。

日本軍は現在の中国侵略の作戦行動において、中国の文化教育施設の大規模な破壊を目的とし、上海にはしひまに爆撃を加えている。今日までに、過去二十年来全中国の教科書の75パーセントを提供してきた商務印書館や、計り知れない価値を有していた東方図書館、著名な国立暨南大学、同済大学、持志大学、中央大学医学部などの文化教育機関はすでに跡形もなく破壊された。およそ日本軍国主義武装勢力のむかうところ、中国の文化教育機関はすべて彼らの猛攻・猛爆によって破壊されている。

たとえ戦時下といえども、意図的に文化教育機関を破壊することは許されない。しかるに、日本政府は一方で中国に対する侵略戦争は行っていない

いと明言しながら、国際法上文化施設の保護が明確に規定されているにもかかわらず意図的に中国の文化教育機関を破壊しているのである。全世界の知識層の指導者たちが義によって立ち上がり、中国の文化教育機関を壊滅せんとする日本軍の野蛮な振る舞いを公に糾弾し、日本側がこれ以上こうした行動をとらぬよう阻止するための方策を講ぜられんことを願うものである。⁽¹⁵⁾

蔡元培はこの緊急アピールを、アメリカ・アカデミーのニコラス・バトラー、ハーバード大学学長ローレンス・ロウウェル、哲学者ジョン・デューイ、物理学者アインシュタインなど八人の著名知識人をはじめとするアメリカの文化界、教育界に向けて送った。彼らの眼をアジアに向けさせ、日本が今中国で何を行おうとしているかを知らしめ、彼らの働きかけによって大国アメリカの世論を動かそうと蔡は企図していたのである。日本の仕掛けた戦争が、単に中国の経済的政治的支配を目論むだけのものではなく、中国文化そのものの消滅を謀るものとして認識されていたからこそ、彼はこのようなアピールを行ったのである。すなわち、蔡元培にとって祖国中国を守るということは、領土を保全し国民を目前の殺戮から守るだけのものではなく、中国がこれまで拠って立ってきた、そしてこれからも基礎となる、中国文化そのものを守ることを意味していたからである。日本軍による文化教育機関への破壊行為は、中国の文化や歴史の継続性を損ない、民族存立の基盤を危うくするものとして、蔡元培の眼に映っていたのである。彼にとっては、世界文化の一翼を担ってきた中国文化を維持発展させていくために必要不可欠な文化教育施設を守るとは、軍事的に日本と対抗していくことと同じ重みを持っていたのだ。だからこそ彼は、ともに中国を守らんとする者として、抗日運動に身を投じた青年たちに強い連帯感を覚えたのである。

日本軍の侵略に立ち向かい祖国を守ることは、個々の青年にとって直接的には何の利益にもならないはずである。しかし、にもかかわらず彼らは敢えて立ち上がり、死を賭して戦おうとしている。そんな彼らの姿こそ、蔡元培がかつて「對於新教育的意見」の中で讃えた、理想的な人間像の現れにほかならない。

中国を日本の侵略から守ることは中国文化を守ることであり、それはとりもなおさず人類の文化を守ることでもある。この人類の文化を守る崇高な任務に自ら志願して戦っている彼らを前にして、共産党云々という取るに足りない問題を持ち出す国民政府は、蔡には許し難い存在に思われたにちがいない。蔡元培にしてみれば、憂国の情に衝き動かされ、個人的には何ら報われることのない無償の行為である抗日運動に立ち上がった青年たちこそが、祖国の「元氣」の源なのだから。次のようなエピソードも、蔡元培の姿勢を如実に伝えている。

1931年12月、蔡元培を含む何人かの要人が学生請願団に取り囲まれ、要人の一人が殴打されるという事件が起こった。学生たちは北平から抗日を訴えて首都南京に請願に来たのであった。政府当局は、これら学生の暴力行為を厳しく処罰しようとしたが、蔡は学生たちを咎めるどころか、政府と社会が彼ら抗日学生を擁護することを求めたのである。⁽¹⁶⁾

かつて蔡は、「青年だけが信念を持っており、青年だけが死を恐れない。彼らに革命工作を担わせないで、いったい誰に担わせようと言うのか」と強い口調で語ったことがある。⁽¹⁷⁾ 国民党当局に異を唱えて、蔡が立ち上がった理由の一つはここにある。彼は祖国を守るために戦う有為の青年たちがむざむざ殺されてゆくのを座視してはいられなかったのだ。

思想・信条の自由は、蔡元培にとって何より尊重されなければならない自明の理であった。だからこそ、特定の政党や宗教に支配されない教育の在り方を模索し続けてきたのである。まして祖国が存亡の危機に立つ今、国民党系であろうと共産党系であろうと、そんなことに何の意味がある、日本軍から祖国を、祖国の文化を守ることこそが急務なのだ……蔡元培はこう考えていたのである。次に示す回想は、左右の思想的対立にとらわれない蔡元培の態度を我々に教えてくれる。

1929年、陽翰笙は、蔡が院長を務める中央研究院の社会科学研究所に招かれた。のちの彼の回想によれば、蔡は陽が左翼的な思想を持っていたことを重々承知の上で社会研究所の実務を委ねたという。実際、彼は中国共産党の地下革命工作員であった。「蔡先生の人物登用は非常に公正で、党派性や偏見がなかった。（中略）当時蔡先生は我々こうした地下革命工作員を庇護してくだ

さった。白色テロの下、もし蔡先生の庇護がなければ、我々の工作は進めようがなかった。」と陽は彼を讃えている。⁽¹⁸⁾

党派にこだわることなく有為な人材を積極的に登用し、祖国の発展を促そうという蔡の姿勢は、終生変わることのない、彼の人生を貫く原則と言えるものである。蔡に誘われて中国民権保障同盟に参加した魯迅は、蔡元培をこう評している。

実のところ、蔡先生のような人も、ただ一般的に進歩に賛成しているから共産党に反対しないというだけだ。共産党の革命がいったいどんなものか、彼ははっきり理解しているわけじゃない。彼は悲嘆してこう言ったことさえある。「国民党は政治上の敵対者を抹殺するためなら、民族の存亡すら顧みないかのようだ」と。これは彼の思いも及ばないことだった。彼が革命に共鳴するのも、つまりは民族のためにほかならないのだ。⁽¹⁹⁾

魯迅が蔡元培の言葉として紹介しているとおり、「政治上の敵対者を抹殺するためなら、民族の存亡すら顧みない」ような国民党当局の抗日運動弾圧が彼を人権擁護運動に駆り立てたのは、それが「国」の「元氣」を損ない、中国文明を滅ぼしかねないと考えたからである。すなわち、力で抗日学生らをねじ伏せようとする国民党政府から、一人でも多くの青年たちを救い出そうとする彼の行動は、彼の教育理念の実践にほかならなかったのである。

3

1932年12月17日、蔡元培らは「發起中国民権保障同盟宣言」を発表した。⁽²⁰⁾

中国民衆が革命という大きな犠牲を払って求めた民権が、今に至るもまだ実現していないことは、まことに痛恨の極みである。世論の抑制、不法な逮捕、殺戮などという記事は新聞紙上で見慣れたものとなり、青年男女が時として政治犯の嫌疑をかけられ、ついには秘密軍事法廷で処罰される

という事態さえ起こっている。公開裁判の場合でさえ、社会世論に対して公民としての権利の擁護を求める最低限度の人権すら剥奪されている。かくのごとき状態に有効かつ十分な改革を望むのであれば、かくのごとき状況を生み出す環境の改造に努力するよりほかないことを我々は熟知している。と同時に、先進諸国にはみな民権を保障する国際組織が設けられ、アインシュタイン、ルネ・グロース、ジョン・デューイ、バートランド・ラッセル、ロマン・ロランらがその指導に当たっていることをも承知している。こうした組織の主旨は、人類の生命と社会の進化に欠くべからざる思想の自由と社会の自由を保障することにある。この同一の理由に基づき、我々は中国民権保障同盟の創設を提議するものである。^(m)

国際的な連帯を視野に入れつつ、最低限度の人権の保障のために尽力せんというのが、同盟創設の趣旨と言ってよいだろう。蔡はこの宣言文中で、活動目的として次の三点を上げている。

1. 社会の関心を引くことのない無名の政治犯の釈放及び不法拘禁、拷問、殺戮の廃絶を要求する。
2. 政治犯に法的その他の支援を行うとともに、監獄の状況、民権圧迫の事実を公表し、世論を喚起する。
3. 結社集会の自由、言論の自由、出版の自由など民権獲得の一切の活動に対し協力援助する。

要するに、蔡元培らが最終目的として目指したのは、中国において人権を確立することであり、当面の最重要課題は、最大の人権侵害である政治犯の釈放を勝ち取ることであったと言えるであろう。蔡元培の起草した宣言文中の、「大多数の、名もなく社会から注目されることのない囚人のために何よりもまず努力したい」という言葉は、前節で述べてきたとおり、抗日運動に参加したために逮捕された多くの青年たちを念頭に置いて発せられたことはいうまでもない。当時、どのくらいの数の青年が逮捕されたり拘禁されたり、さらには秘

密裏に殺されたりしたのかは定かではない。エドガー・スノーは「五万人の政治犯」という言葉を書き残しているし、⁽²²⁾ 1930年8月から10月までの三ヶ月間だけで14万人が殺されたと記す資料もある。⁽²³⁾ いずれにしても、中国民権保障同盟成立当時においても、万をもって数える政治犯や犠牲者がいたであろうことは想像に難くない。蔡元培は、これらの所謂「政治犯」が獄中であつた若い命をすり減らしていく事態に何としても歯止めをかけたかったのである。同盟成立からまもない1932年12月30日、国内外の記者を招いて開催された記者会見の席上での蔡元培の言葉からもそれは窺える。蔡は、ひとしく人である以上、誰もが保障されるべき普遍的人権を有しているという前提に立った上で、

1. 主義主張の違いを問わない。
2. 国籍の違いを問わない。
3. 既決囚か未決囚であるかを問わない。

という三項目を挙げた。蔡が最も強く訴えたかったのは、第三の点である。

まだ刑の定まっていない人については、その人権が他人に蹂躪されてならないことは当然のことです。すでに刑の定まった人についても、もし冤罪であれば当然救済する必要があります。刑が定まり且つ冤罪でもない人については、もし悪人を仇敵のごとく憎むという心理に従えば全く顧みなくてもよさそうにみえます。しかし、人が罪を犯すのは、犯罪学者はこれを生理的欠陥に起因すると考えていますし、社会主義では社会的な原因に起因すると考えています。すなわち、刑罰はその罪過に相応するという根本においてさえ、もとよりなお考慮の余地があるのです。それゆえ、古人に「如得其情、哀矜勿喜」という箴言があり、罪を犯すに到った情状についての考察があるのです。法律による制裁という点では、その罪に相当する罰則は当然であると認めざるを得ないとしても、しかるべき罰則以上にさらに罰を加えてはなりません。もし加えるようなことがあるなら、やはり人権を保障する必要があります。例えば、獄中におけるリンチや虐待などがこれにあたります。ですから、我々は無罪の人に対しても有罪の人に

対しても区別することがないのであります。⁽²⁴⁾

蔡は、法的処罰が適正かどうか以前に、そもそもその人物が現行法に触れる行動に及んだ事情をまず考慮せよと主張している。それが、抗日運動に参加したために政治犯とされた青年たちを暗に示していることは、当日の記者会見に出席した人々にはすぐに理解できたはずである。そして、「如得其情、哀矜勿喜」という『論語』からの引用を翌日の新聞紙上で目にした当時の知識人には、さらに明確に蔡の意図が伝わったにちがいない。蔡の引用した句の上には、実は「上失其道、民散久矣」という言葉が続いているからである。⁽²⁵⁾ つまり、「人の上に立つものが為政者としての正しい道を失ったがために、民心が為政者から離れて久しいものがある。したがって、もし犯罪事実を知ったならば、その犯罪者に憐憫の情を注いでやるべきであって、犯罪を摘発したことを喜んではならない」という含意を持つものだったのである。1930年代においても、多くの知識人にとっては『論語』はいわば「常識」に属する書である。蔡がなぜ『論語』の中のこの言葉を引いたかはすぐにピンと来たに違いない。政治犯という名の犯罪者が存在しているのは、政治権力を握っている国民党当局の腐敗墮落に起因するのだと、蔡はいかにもさりげなく、しかし明確に断罪したのである。当時、蔡元培が魯迅に贈った自作の詩からも、彼の憂国の情と当局に対する憤りが読みとれる。

養兵千日知何用
大敵当前暗不声
汝輩尚容說威信
十重顔甲对蒼生⁽²⁶⁾

これまで長い間兵を養ってきたのは一体何のためだったのか。いま日本軍という強大な敵を目前にしなから、国民政府は兵を動かそうともせず、寂として声もないありさま。そればかりか、国土をむざむざ奪われるに任せておきながら、厚顔にも表面を取り繕い、威信ばかりを口にしてている。彼らは千枚張りの

面の皮で我が人民を欺こうとしているのだ。

蔡元培は、抗日姿勢を明確に打ち出さず、国民を欺いて威信のみを保とうとする国民政府に対する怒りと口惜しさを魯迅に漏らしていると言えるだろう。政府が動こうとしないから青年たちが立ち上がったというのに、それを取り締まるなどということはもってのほかのことである。蔡元培はこう考えて、彼らを獄中から救い出すために積極的な活動を開始したのである。

あこのころの蔡先生は、ほとんど《新青年》時代（五四運動当時を指す……筆者注）の鋭気を相変わらず保持されておいでで、英気勃勃として、それが言動にも溢れていました。⁽²⁷⁾

魯迅の妻許広平のこの回想からは、65歳という当時としては高齢と言える蔡元培の、政治犯釈放に闘志を燃やして取り組んでいた姿が浮かび上がってくる。

結びに代えて

中国民権保障同盟は、蔡元培と孫文未亡人宋慶齡を中心に、具体的な政治犯の存在がわかるたびに、政府当局に対して釈放要求を提出したり、内外にアピールを発表し続けた。また、代表を陸軍監獄、軍事執行処看守所などに派遣し、政治犯を慰問するとともに、監獄の待遇改善を訴え続けた。⁽²⁸⁾ こうした具体的な活動の中心となっていたのが楊銓であった。この楊銓の暗殺を契機として同盟はその活動の幕を閉じるのであるが、⁽²⁹⁾ この暗殺事件が蔡元培に与えた衝撃はきわめて大きかった。同盟での活動以前から、楊銓は蔡の片腕として中央研究院の運営にあたってきた人物であり、蔡とは個人的な往来も多かったから、蔡の無念さ、憤りは想像するに余りあるものであった。

民権保障同盟執行委員に対するテロの噂の飛び交う中で執り行われた楊銓の葬儀当日、葬儀を主宰した蔡は打ちひしがれた様子ではあったが、テロには屈さないという姿勢を明確に示した。葬儀から戻った魯迅は馮雪峰に、宋慶齡と

蔡元培の態度に対して感服した様子でこう語っている。

今日、蔡先生もみえられた。彼はとても悲しそうだった。楊杏佛を殺したのはもともとは孫夫人と蔡先生に対する警告だ。でも、あの二人は決然としていた。⁽³⁰⁾

蔡元培はその後、非運に倒れた楊銓を悼み、遺児のために基金を募るとともに、中央研究院に「楊銓社会科学紀念獎金」という基金を新たに設けて彼を記念している。ただ彼は、楊銓を暗殺した黒幕が他ならぬ国民党総統蒋介石であったことを知っていながら、その蒋介石をどうすることもできない自分がさぞ菌痒かったことであろう。晩年のエピソードが当時の彼の無念さを伝えている。

日本軍の眼を逃れ香港に隠棲していた蔡元培を、旧知の画家劉海粟が訪ねたことがあった。1939年、蔡が亡くなる前の年である。衣食もままならぬありさまで暮らす蔡元培の生活を見かねた劉は、彼に重慶に行くつもりはないのか尋ねてみた。当時国民党の本拠地だった重慶に移れば、蔡のような国民党草創期からの元老はそれ相応の厚遇が約束されていたからである。すると、蔡は眼をぎらりと光らせてこう語った。「楊杏佛は奴らの手に掛かって死んだではないか！ 私は重慶などに行くわけには行かない。」⁽³¹⁾ そのころの蔡元培には、もはや以前のような活力も気力も失われてはいたが、人権擁護のためにともに闘った楊銓を悼む気持ちは決して消え去ることはなかったのである。

教育の政治からの独立を常に掲げ、「自己の能力を發展させ、その人格を完成し、人類の文化において一構成分子としての責任が果たせるよう手助けする」という自らの教育理念の実現を目指して生きてきた蔡元培は、抗日戦争という時代の大波に翻弄されるように、人権擁護運動に深く関わっていった。しかし、これまで述べてきたとおり、それは特定の政治勢力のためではなく、純粋に祖国と民族のために身を捧げんとした青年たちのためであった。そうした彼の活動そのものが、まさに「人類の文化において一構成分子としての責任」を果たそうとしたものであり、彼の人生は見事に一もって貫かれている。晩年の彼は、祖国の惨憺たるありさまを憂いつつも、何もできぬ自分をこう嘆いている。

今や国土の多くが失われ、人民は行くところもなく流浪しているというのに、政權を握る者は救国の大業を担えきれず、私もすっかり年老いてしまった。⁽³²⁾

彼の教育や人権に寄せた理想は、今日なお中国に根付いているとは言えない。しかし、彼はその生涯をかけて、「完成された人格」とはいかなるものかを自ら後世に示してくれたと言えるだろう。

もともと知識人という者はとても動揺しやすい。振り返ってみれば、過去数十年の間、篝火を手にし立ち止まることなく思想界文化界を前進し続けてきた者がどれほどいるだろうか？ 数十年一日のごとく、利禄のために節を曲げなかった者がどれほどいるだろうか？ 終始一貫真理に忠実に、何者に対しても恥ずるところのない者がどれほどいるだろうか？ 民主主義と自由のために徹底して闘い、死の危険すら避けようとしなかった者がどれほどいるだろうか？ 常に青年の先達となり、知行合一して青年を欺くことのなかった者がどれほどいるだろうか？

だからこそ、我々は蔡先生のご逝去に際して、いっそう痛惜の念に堪えないのである。⁽³³⁾

中国民権保障同盟で行動を共にしたことのある胡愈之のこの追悼の辞が、どんな言葉にもまして雄弁に蔡元培の生涯を要約している。彼の言葉どおり、蔡元培は祖国を愛し、祖国の未来の担い手たる青年たちを終生欺くことなく愛護し続けたのだ。そして、蔡元培が蒔いた理想の「種」が、少なくとも彼と共に生きた人々の心の中にしっかりと根付いていたこともまた確かなことである。

註

- (1) 蔡元培『中国倫理学史』；高平叔編『蔡元培全集』第二卷、21頁。中華書局、1984年。
- (2) 蔡元培『中国倫理学史』；『蔡元培全集』第二卷、105頁。
- (3) 蔡元培『中国倫理学史』；『蔡元培全集』第二卷、107頁。
- (4) 蔡元培「伝略」(上)、1919年8月；原載『蔡子民先生言行録』、『蔡元培全集』

第三卷、327頁。

- (5) 「中国民権保障同盟」については、拙稿「中国民権保障同盟の成立——中国現代知識人の『民権』擁護運動——」(《熊本大学文学部論叢》第31号、1990年3月)を参照されたい。
- (6) 孫瑛『魯迅在教育部』1頁、天津人民出版社、1979年8月初版。
- (7) 1912年2月8、9、10日の《民立報》に発表。のちに「對於教育方針之意見」と改題。『蔡元培全集』第2巻、130頁。
- (8) 詳しくは拙稿「蔡元培の美育論」(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』、汲古書院、1986年)参照。
- (9) 許德斯「吊吾師蔡子民先生」、原載：重慶《中央日報》1940年3月24日、蔡建國編『蔡元培先生紀念集』(中華書局、1984年)所収。57～60頁。
- (10) 蔡元培「教育獨立議」、《新教育》第4巻第3期、1922年3月。『蔡元培全集』第4巻、177頁。
- (11) 詳しくは、陳哲三『中華民國大學院的研究』(台湾商務印書館、1976年)参照。
- (12) 蔡元培「《大学院公報》發刊詞」；原載《大学院公報》第一年第一期、1928年1月。『蔡元培全集』第五巻、194頁。
- (13) 蔡元培「我在教育界的經驗」、《宇宙風》第55、56期、1937、38年。『蔡元培全集』第7巻、201頁。
- (14) 蔡元培「請國際連盟制止日軍侵滬暴行電」；原載《中央日報》1932年2月1日、『蔡元培全集』第六巻、167～8頁。
- (15) 蔡元培「致巴特勒等人電」；『蔡元培全集』第六巻、168～9頁。
- (16) 「北平示威騷擾中央黨部經過」；原載《中央周報》第185期、孫常燁編『蔡元培先生全集』1422頁、台湾商務印書館、1968年。
- (17) 余毅(顧頤剛)「蔡元培先生」；孫常燁編『蔡元培先生全集』1356頁、台湾商務印書館、1968年。
- (18) 陽翰笙「追念蔡子民先生」；原載《人民日報》1980年3月4日、蔡建國編『蔡元培先生紀念集』(中華書局、1984年)所収。154～156頁。
- (19) 馮雪峰「回憶魯迅」、人民文學出版社、1952年初版、1981年版91頁。
- (20) 中国民権保障同盟成立にいたる経緯については、拙稿「中国民権保障同盟の成立——中国現代知識人の『民権』擁護運動——」(《熊本大学文学部論叢》第31号、1990年3月)に詳しい。
- (21) 蔡元培「發起中国民権保障同盟宣言」；原載《申報》1932年12月18日。『蔡元培全集』第六巻、230～231頁。
- (22) エドガー・スノー『目覚めへの旅』77頁、松岡洋子訳、紀伊国屋書店、1963年。
- (23) 沈鵬年『魯迅研究資料編目』490頁、上海文芸出版社、1958年。
- (24) 蔡元培「在中国民権保障同盟中外記者招待会致詞」；原載《申報》1932年12月31日；『蔡元培全集』巻六巻、232頁。
- (25) 『論語』「子張第十九」
- (26) 『魯迅日記』の1933年1月17日の項に、「下午往人權保障大同盟開會、被舉為執行委員。蔡子民先生為書一箋、為七律【絶】二首。」とあり(『魯迅全集』第15巻、59頁)、蔡元培自筆の写真が高平叔編著『蔡元培年譜』(中華書局、1980年2月)に掲げられている。
- (27) 許広平「留存於魯迅先生処幾位友人的旧詩集録」；原載《上海周報》第二巻第八期、

- 1940年8月3日。『許広平憶魯迅』123頁、広東人民出版社、1979年。
- (28) 魯迅研究室 陳漱渝、陶忻編『中華民国資料叢稿 中国民権保障同盟』（中国社会科学出版社、1979年）に詳しい。
- (29) 楊銓については、拙稿「魯迅と楊銓——中国民権保障同盟をめぐる人々 その1——」；《熊本大学文学部論叢》（第43号、1994年2月）に詳しく記したので、ここでは贅述しない。暗殺の経緯を含め、拙稿を参照されたい。
- (30) 馮雪峰『回憶魯迅』93頁。
- (31) 劉海粟「憶蔡元培先生」：原載《藝苑》（南藝學報）1983年第1期、蔡建國編『蔡元培先生紀念集』所収。224頁。
- (32) 注（31）に同じ。
- (33) 胡愈之「我所見的蔡元培先生」；原載《上海周報》第一卷第22期、1940年4月6日。蔡建國編『蔡元培先生紀念集』所収。103頁。